

東北大学附属図書館が開講してきた情報探索・アカデミックライティングの 全学教育科目 12 年間のあゆみ：記録と展望

吉植 庄栄

1. はじめに

東北大学附属図書館（以下 当館）は平成 16（2004）年度から全学教育科目として、情報探索とアカデミックライティングに関する授業を開講してきた。この授業は平成 27（2015）年度をもって 12 年目を迎える。この間、受講生の要望や時代の要請、そして担当者や運営体制の変化に伴い、様々な変転を経て今に至る。現在 12 年前の内容を振り返ると、共通の部分も確かにあるが、大きく変貌を遂げていることが分かる。

本年度（平成 27（2015）年度）、当科目は後期の第 2 セメスター（以下 後期）から前期の第 1 セメスター（以下 前期）に移動し、受講生も前年度の 4 倍に増えた。年々減少傾向にある当科目受講生が V 字反転したことで、これまでは目立たなかった問題や新たな課題が浮き彫りになった。

一方、レポートに関する小冊子作成を目的とし、最終的には東北大学の全新生に対してアカデミックラ

イティングスキルの指導を目指す、レポート・ワーキンググループ（以下 レポート WG）が、高度教養教育・学生支援機構で発足した。このレポート WG は、高度教養教育・学生支援機構に属し全学教育に携わる教員 3 名が立ち上げたものである。当館にも声がかかり、その結果、筆者が参画する機会を得た。

当科目も発足当時から、「いずれは新入生全員に対して」という考えは存在していたが、この 12 年間、それを成就するには至らなかった。全学教育でのこの動きは、当科目を新しいステージに進ませる良い機会であると筆者は、感じている。

当科目の開講時期の移動とレポート WG の立ち上がりの一つの機会とし、当科目のこれまでを振り返ってまとめる。また、今後の展望を考え、新しい動きについて報告する。なお現在までの経緯は、事務文書類や先行報告及び担当者への聞き取りに基づきまとめる。

2. 概史

当科目のあゆみを受講生数、内容の概略をもって振り返る。

2.1 受講生数の推移

開講初年度から 4 年目までは、109 名、140 名、95 名、119 名と大人数であった。5 年目である平成 20（2008）年度²から 50-70 名前後を推移していたが、平成 25（2013）年度には 25 名となり、翌年度は 33 名と若干持ち直した。この減少は、開講日時を従来の金曜 5 限から木曜 5 限に変更したことが大きな原因と考えられる。前期に

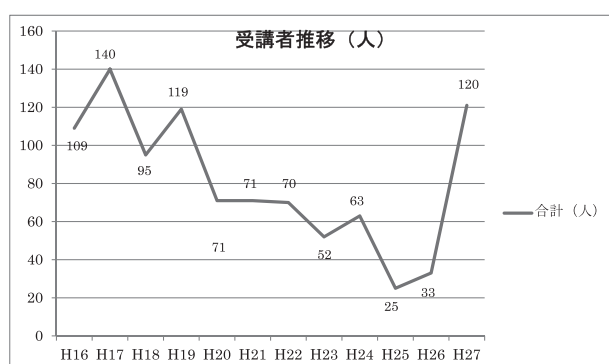


図1 受講生数推移のグラフ¹

1 当初履修者を集計している。また聴講生及び単位互換制度による他大学受講生（平成 26 年度に宮城教育大学から 1 名）、及び高大連携事業による高校生の受講者も含めている。
2 この年から受講生数が 50-70 名前後になった原因は、不明である。聞き取りによると、同じ時間帯に必修や人気のある授業が開講されたからだ、という情報があつたともいう。

移動した平成 27 (2015) 年度には、120 名と再度大人数の受講生となった。

2.2 講義内容と担当講師の推移

講義内容と担当講師の推移については、この 12 年の

間、大きな変化があった年に絞り、次章以降で紹介する。当科目発足の経緯を 3 で、開講した平成 16 (2004) 年度を 4、教員と図書館職員の担当授業が明確に分かれた平成 22 (2010) 年度を 5、そして前期に移動した平成 27 (2015) 年度を 6 で、それぞれ取り上げる。

3. 発足の経緯

3.1 「図書館を活用した情報探索・レポート作成術」に先行するもの

参考調査係に残されている当時の企画・発案文書を確認すると、京都大学附属図書館の講義と本学の全学教育科目「情報基礎」を先例として参考にした形跡がある。

(1) 京都大学附属図書館「全学共通科目「情報探索入門」

当科目の構想には、先行して京都大学附属図書館が平成 10 (1998) 年度から開講していた「全学共通科目「情報探索入門」」が大きな影響を与えている。この科目は当時京都大学工学部教授にして附属図書館長であった長尾真氏の以下の考えに基づいて構築された。

情報活用法についてはシステムティックに学生に教育する必要がある。図書館が中心になってやる情報活用に関する講義科目は、全国の国立大学ではほとんど例がないがその先鞭をつけたい。図書館職員の勉強にもなり、図書館職員の学内における存在価値が一層広く認識されるようになる。図書館職員と一緒に情報リテラシーの問題に取り組むことが必要である³。

これに基づき京都大学の科目は、「大学図書館への招待」「分類の一般概念と分類理論」「情報の種類」「目録情報とその利用法」「データベースの種類とその利用法」「インターネット情報と利用法」「参考資料の種々とその利用」「図書館情報、および図書館の種類とその機能」

という授業構成⁴となっている。現在東北大学の科目を元に見ると、京都大学のは図書館学的な要素である目録や分類の要素がある。これは発足時から教育学部図書館学講座の協力を得ていることが影響を与えている。本学には図書館情報学の専門講座が無いので、当方と比較するとこの点が特徴的である。

(2) 本学全学教育科目「情報基礎 A」

本学の全学教育で開講している「情報基礎 A」の資料も、同様に多く残されている。当科目は、電算機処理の情報リテラシーを教えるもので、情報学の教員が担当し、コンピュータやネットワーク、プログラミング、情報倫理といった内容で構成されている。これらの内容を見るに、「情報リテラシー教育」といっても図書館で考えるイメージと、情報系で考えるそれは、異なることが分かる。当科目の企画者によると、この「情報基礎 A」の内容とは差別化し、全く新しい科目を構築するため別のアプローチを目指したとのことである。

3.2 「図書館を活用した情報探索・レポート作成術」の発端

当科目の発端は平成 15 (2003) 年度に刊行された『東北大学生のための情報探索の基礎知識 (以下『基礎知識』)⁵』にある。当冊子は、東北大学の学生・院生・研究者に対して図書館を中心とする学術情報の入手のノウハウを網羅的・体系的に記載したものであった。当冊子は大きく図書館業界に評価され、当科目の発足後の平成 17 (2005) 年度に第 40 回国立大学図書館協会賞

3 慈道佐代子. 全学共通科目「情報探索入門」の試み：図書館の役割について. 大学図書館研究. 1998, 54, p.43.

4 同上. p.44.

5 当冊子について、本稿では深く触れないが、以下の報告がある。

米澤誠, 阪脇孝子, 高橋菜穂子. 情報探索マニュアルの作成と職員向け講習会の実施：東北大学附属図書館での事例報告. 大学図書館研究. 2003, 69, p.34-41.

菅原透, 佐藤初美, 米澤誠. 情報リテラシー・サービス 情報探索マニュアル作成を軸とした情報リテラシー教育の展開とオープンソースの試み. 医学図書館. 2005, 52 (1), p.25-30.

を受けるほどのものであった。その成果を受けて、この冊子を教科書とした授業を構築しようという動きが起きた。

このこと（筆者注 『基礎知識 2003』の刊行）が契機となり、その内容の充実ぶりを評価した当時の副館長（筆者注 故今泉隆雄教授）が、この冊子を活用した全学教育科目（1～2年生向け科目）の企画・設置に尽力し、2004年度からの開講が実現したのである。授業プログラムの設計にあたっては、情報探索の技法とともにレポート作成の技法を重点的に扱ったところが特色である⁶。

上述のように、当科目の構想は、当初から単なる検索ツールの紹介に留まらず、レポート作成までも視野に含まれたものであった。

学習の到達目標は、「各自設定した課題に関するレポート作成を通じて、情報探索・レポート作成術を習得する」とした。単に情報探索方法を習得するだけでなく、レポート作成術の習得も視野に入れた2本柱の授業内容になっていることが、大きな特徴であると考えている。授業の最終的な成果として、レポー

トなどをまとめる技術を習得しなくては、大学生としての情報リテラシー教育にならないからである⁷。

これら報告文から、当科目の構想は初期から、情報探索を一方の柱としつつ、もう一方の柱をレポート作成というゴールを大きく意識したものであったことが分かる。この点は京都大学の先行事例には無い特色で、当科目独特のものと言えよう。

当科目がレポート作成というゴールを意識した内容で構想されていたことについては、当時の担当者が文献探索とレポート・論文作成を一体のものと考えていたからである。これは「学生が目標とする到達点（よいレポート）を先に示し、次にその目標の実現方法として、適切な情報評価と適切な情報探索を教授することになる。情報リテラシープロセスを逆順にたどり、情報探索の必要性を理解させるのである⁸。」という企画時以降の業績の記述にも見られる。つまり文献・情報探索のみを教授しても受講生は、その位置づけや意義が理解できず、自分に必要な情報とは理解できない者が多い。しかしレポート・論文作成の一環として文献探索を体系的に教えることで、受講生にとって非常に必要な情報であることが認識され、実践的に魅力的な内容になる、というものである。

4. 平成 16（2004）年度：「図書館を活用した情報探索・レポート作成術」の開講

4.1 開講時の内容と実施体制

以上を背景として定められた講義の内容は次の表の通りである。レポート作成を意識しているため、この

分野で著作⁹がある酒井聡樹助教授（当時）が参画している。

表1 平成 16（2004）年度講義内容と担当講師¹⁰

タイトル	担当	目標
大学図書館の役割と課題	今泉	大学図書館の役割と課題、東北大学附属図書館概要と特色
情報探索の基礎	大町	文献情報、論理演算・トランケーション等の情報探索の基礎技能

6 米澤誠、ウェブ主流時代における情報リテラシー教育再構築の試み、薬学図書館、2006、51（3）、p.193.

7 菅原透、佐藤初美、米澤誠、情報リテラシー・サービス：情報探索マニュアル作成を軸とした情報リテラシー教育の展開とオープンソースの試み、医学図書館、2005、52（1）、p.29.

8 米澤誠、レポート作成を起点とした情報リテラシー教育の試み、医学図書館、2007、54（2）、p.160.

9 酒井聡樹著、これから論文を書く若者のために：イントロ大切 何をやるのか どうしてやるのか 明確に ホ〜♪、共立出版、2002.5、232 p.

10 今泉=今泉隆雄教授（附属図書館副館長、文学研究科）

大町=大町真一郎助教授（工学研究科情報システム学）

泉山=泉山靖人助手（教育情報学研究部）

酒井=酒井聡樹助教授（生命科学研究科）

岩谷=岩谷幸雄助教授（電気通信研究所）

オンライン目録 (1)	泉山	目録情報の内容と構成, オンライン目録 (OPAC) の仕組み
オンライン目録 (2) 実習	泉山	OPAC の操作実習
レポート作成法 (1)	酒井	一般的なレポートの作成方法や手順
レポート作成法 (2)	酒井	レポートの文章作成技術
2次情報データベース (1)	岩谷	2次情報データベースの種類と内容, 構成
2次情報データベース (2) 実習	岩谷	2次情報データベースの操作実習
電子ジャーナルとオンライン新聞	岩谷	電子ジャーナル, オンライン新聞
レポート作成法 (3) 実習	酒井	レポート作成実習
各種参考資料の使い方 (1)	泉山	各種参考資料
各種参考資料の使い方 (2) 実習	泉山	各種参考資料の使い方実習
レポート作成法 (4) 実習	酒井	グループに分かれて, 各自のレポートの相互チェック
研究活動と学術情報の流通	今泉	大学における学術研究活動と学術情報流通の概要
レポート提出	今泉	各自設定した課題に関する文献調査結果・内容に関してのレポートを作成・提出

平成 16 (2004) 年 10 月に全学教育科目・総合科目・カレントトピックス¹¹としてスタートした当講義の受講希望者数は 100 名を超え, 盛況であった。受講生が多いことは, 当科目が学生のニーズと合致していたことを示していた。講義は, 川内北キャンパスのマルチメディア棟 1F 端末室 (約 100 台) で行い, 開講時間は後期の金曜 5 限 (16:20-17:50) で, 全 15 週のうち 13 週が講義, 学園祭のため 1 週休講, 最終週は最終レポート作成時間であった。

講師陣は, 当時の当館副館長の今泉隆雄教授を筆頭に 5 名の教官が講義をオムニバス形式で担当した。発足時はこの 5 名の教員による講義が中心であり, 実習がある際は, 前半に教員が講義を行い, 後半に図書館職員が補助者として実習指導を行った。

事務局は当館総務課情報企画係 (現在の学術情報基盤係の前身。平成 26 (2014) 年度の組織改編で変更。) が担当し, 科目全体の運営統括を行った。実習等は『基礎知識』作成を担当した, マニュアル作成 WG (拡大情報サービス WG 本館各課から 1 名, 各分館から 1 名) の約 10 名のメンバーが輪番で担当した。なお翌年度 (平成 17 (2005) 年度) から図書館情報教育支援 WG が発足し, 現在に至るまで運営を担当している。

成績評価は, 出席 50%, 最終レポートの提出 50% であっ

た¹²。平成 17 (2005) 年 2 月に半期にわたる講義が終了し, 93 名分の提出レポートと出席状況に基づき成績評価が付与され無事終了した。授業の最終日に行う全学教育授業評価の自由記述欄には「レポート作成法大変分かりやすかったです」といったレポートに関する好意的なコメントと, 「資料集めに役立ちそうな知識がたくさん得られました。ありがとうございました。」といった情報探索についての好意的なコメント, その両方が書かれたコメントが寄せられている。

4.2 開講初年度から平成 21 (2009) 年度まで

この間, 図書館職員の人事異動による担当者の変更や教員の若干の入れ替わり, 講義の順番の変更等があったものの, 概ね開講当時の内容で実施していた。特筆すべき点は, 平成 18 (2006) 年度から開始された当科目に関するブログである。このブログ開設の経緯は佐藤 (2007)¹³ に詳しい。当記事から, ブログは, 図書館サービスの中でも新しい試みとして注目されていたことが感じ取れる。ブログに対して学生からのコメント投稿もあり, 科目運営側と受講生との双方向コミュニケーションの端緒としての役目を果たした。当ブログはその後, 当科目に参画している図書館職員が輪番で書くようになり, 平成 21 (2009) 年度まで継続された。

11 当科目は開講から現在まで, 選択科目である。

12 現在は, 出席 50%, 最終レポート 40%, 諸課題 10% であり, それほど変化は無い。

13 佐藤初美, 大学生のための情報検索術 Blog. 大学の図書館, 2007, 26 (9), p.148-152.

5. 平成 22 (2010) 年度：教員と図書館職員の担当週を明確に分割

5.1 平成 22 (2010) 年度の変更内容

表 2 平成 22 (2010) 年度講義内容と担当講師¹⁴

タイトル	担当	目標
学術情報探索方法 (1) 大学図書館の機能と役割について	柳澤 図書館職員	・大学図書館の機能と役割, 東北大学附属図書館の歴史と特色 ・本授業の目的, スケジュール等について説明
資料・情報の活用方法 (1) レポート作成法①	酒井	・レポート・論文の特徴 ・レポート・論文のテーマの決め方, 構想の練り方, タイトルの付け方
資料・情報の活用方法 (2) レポート作成法②	酒井	・レポート・論文における考察・議論の展開
資料・情報の活用方法 (3) レポート作成法③	酒井	・レポート・論文を書くために必要な文章技術
学術情報探索方法 (2) サーチエンジンから学術情報検索へ	[柳澤] 図書館職員	・サーチエンジンの特徴, 注意点, 有効利用方法等
学術情報探索方法 (3) 図書の検索	[柳澤] 図書館職員	・図書および雑誌の特徴 ・大学図書館にある資料の特徴 ・文献情報の読み方や文献の整理の仕方 ・オンライン目録の基礎
学術情報探索方法 (4) 論文の検索①	[柳澤] 図書館職員	・雑誌論文の探し方・入手の仕方 ・データベースの特徴, 利用方法 ・電子ジャーナルの概要, 特徴, 注意点
学術情報探索方法 (5) 論文の検索②	[柳澤] 図書館職員	
学術情報探索方法 (6) その他の情報	[柳澤] 図書館職員	・オンライン新聞
学術情報探索方法 (7) 図書館でのグループ演習	[柳澤] 図書館職員	・参考図書の特徴, 利用方法 ・参考図書やインターネット上の情報を組み合わせた情報の入手方法
資料・情報の活用方法 (4) 研究活動の実際と情報検索①ー自然科学分野	廣谷	・自然科学系の研究活動の実際と情報検索の事例
資料・情報の活用方法 (5) 研究活動の実際と情報検索②ー人文社会科学分野	佐倉	・人文社会科学系の研究活動の実際と情報検索の事例
学術情報探索法 (8) まとめーこれから大学図書館をもっと活用するために	泉山	・本授業全体のまとめ・図書館学的な内容

14 柳澤=柳澤輝之教授 (附属図書館副館長, 医学系研究科)
 酒井=酒井聡樹准教授 (生命科学研究科)
 廣谷=廣谷功准教授 (薬学研究科)
 佐倉=佐倉由泰教授 (文学研究科)
 泉山=泉山靖人助教 (教育情報学研究部)

この年度から教員担当の週と図書館職員が担当する週に分割された。発足時と比較し、図書館職員が前面に出ることになり、改編が大きく行われている。

これについては、従来までの教員の解説半分、図書館職員の実習半分という構成が教員からもやりづらいつとの指摘があったことが発端である。また、学生からも前半と後半の内容が乖離しているという指摘があり、図書館職員にも実習時間とその説明時間を増やしたいという考えもあって、その改編を後押しした。その結果、図書館職員が担当する週は、各週に講義担当者を割り当てる方式になった。

また、平成16(2004) -18(2006)年度の萌芽期には、WGメンバー全員が当講義の分担をしていた¹⁵が、平成19(2007)年からは本館勤務のWGメンバーだけが授業に関わるように変化していた。しかしこの平成22(2010)年度から全メンバーが¹⁶授業に再び参加することになった¹⁷。また運営体制も、これまで事務局を担当していた総務課情報企画係から、情報サービス課参考調査係に変更になることで、当科目の性格が大きく変わる嚆矢となった。

5.2 アクティブラーニングの萌芽とその後の展開

この時期の授業内容の特色といえるのがアクティブラーニング、グループワークの萌芽である。これまで講義方法は従来の大人数一斉・一方向授業方式であった。実習にしても最終課題にしても、個人の作業で完結しており、自助努力が基本原理であった。しかしこの時期を境に、別演習が導入されるようになる。実際、この年度の実習からグループ演習が、第11週に導入されている。

その後、平成24(2012)年度の当館(本館)のラーニング commons の部分完成も、この動きに拍車をかけ

た。図書館本館1階のメインフロアに完成したフレキシブルワークエリアやPCエリアは、アクティブラーニングを念頭に置いた施設である。これらを実習スペースとして活用することが、当科目のスタイルをさらに変えていったと言えよう。

また、授業を教員と図書館職員で担当する回を明確に分割したことは、図書館職員に実習補助者としての位置づけから実質的に講義担当者としての役割をも担うという結果に導いた。つまり90分間実習のみを行うことは現実的ではなく、実習に入るための説明部分が前半に置かれるのが普通である。そのため図書館職員も実習のみならず説明(いわば講義)の準備を行うようになった。この結果、これまで情報探索の実習に特化していた参加が、情報探索の背景にある理論的な部分の説明や、さらに一歩進んで実際のレポートの書き方のテクニックや、テーマの決め方までに展開していった。

また2.1で示したように金曜日5限から木曜日5限への開講時間変更¹⁸に伴い、受講生が20-30人台(平成25(2013) -26(2014)年度)まで減少した結果、ディスカッション等を中心とする基礎ゼミ¹⁹に似た少人数教育の形式に自然となっていった、ということも背景として考えられる。少人数になればなるほど、講義手法が個人指導的になることは自然である。他の科目には希である特色として、提出レポートを複数の眼で添削し、コメントを付与して返却する、という作業を開始したのも、この時期からである。この動きと連動して、平成24(2012)年度から受講生が当科目について相談することができる、大学院生のTA(平成26(2014)年度からは本学学習支援センターのSLA(Student Learning Advisorの略)²⁰も1名参入)によるサポートデスクも設置された。しかし利用者数は低迷した。サポートデ

15 発足時の図書館職員は、あくまでも実習補助者の位置づけであり、全体計画や講義内容の策定には関わっていなかった。授業担当教員の指導の下、最終レポート等の評価作業は、事務局のみが取りまとめていた。

16 (平成22年度)6月1日部課長打ち合わせ(全学)資料(参考調査係作成)によるとこの変更について以下のように理由が述べられている。

(問題点)

- ・担当を限定することで、図書館における体系的な利用者教育の検討が難しい。
- ・全学教育、および各館の講習会全体の把握と情報共有が難しい。

(変更案)図書館情報教育支援WGメンバー10名(筆者注 全員が担当)

期待される効果

- ・WG内の情報共有、利用者教育の全体像把握が可能
- ・若手職員の育成と、講習会での知見活用

17 最終レポートの評価作業は、授業担当教員の指導の下、平成22年度からWG全メンバーが行うこととなった。評価については、その後一人の受講者のレポートを複数人でチェックし、コメントを付与した上で返却する、といった作業に展開していった。

18 金曜5限には大学入試等のため休講を余儀なくされるケースが多いため、受講者増も視野に入れて、試みに移動させたとのことである。

19 本学の初年次教育の一つの形態である。20名以下の少人数で、実習を中心とし自ら探求することで大学の学びを体得するものである。

スクで相談することは任意であり、必要性を感じる受講生のみが訪れるという制度は、日々他の課業に忙しい学生に浸透しなかったのではないか。

以上の背景から、当科目の性格も大きく変貌を遂げたと推測される。なおこの時期の運営については、横山（2012）²¹ や坂本・工藤（2013）²² に詳しい。

加えて科目名であるが、従来の「大学生のための情報検索術」から平成 23（2011）年度には『レポート力』アップのための情報探索入門に変更された。「情報検索が何に役立つのかがシラバスを見た学生にわかりやすく伝え²³」るための名称変更であった。

6. 平成 27（2015）年度「大学生のレポート作成入門」：大人数下のアクティブラーニング・個別指導

6.1 平成 27（2015）年度の変更内容

表 3 平成 27（2015）年度講義内容と担当講師²⁴

タイトル	担当	目標
大学図書館の活用法（1） 大学図書館を使いこなそう	西尾 図書館職員	・授業概要・大学図書館概要 ・レポート体験の振り返りと共有 〈グループディスカッション〉
レポート作成法（1） レポート作成法①	酒井	・レポート・論文の特徴について理解する ・レポート・論文のテーマの決め方、構想の練り方、タイトルの付け方など
レポート作成法（2） レポート作成法②	酒井	・レポート・論文における考察・議論の展開の仕方など
レポート作成法（3） レポート作成法③	酒井	・レポート・論文を書くために必要な文章技術
学術情報探索法（1） テーマを決める・基礎知識を得る	[西尾] 図書館職員	・レポートの作成手順と情報探索の必要性 ・テーマ設定のポイント、事柄を調べるツール ・共同研究の概要説明 〈グループワーク〉
学術情報探索法（2） 本の探し方① OPAC 検索	[西尾] 図書館職員	・OPAC ・図書の入手 〈PC 実習〉
学術情報探索法（3） 本の探し方②ブラウジング	[西尾] 図書館職員	・ブラウジングから資料を探す方法 ・参考文献リストの読み方 〈PC 実習，グループディスカッション〉

20 主に 1, 2 年生の学習をサポートする先輩大学院生のことである。学習支援センターが運営している。東北大学学習支援センター（SLA サポート），<http://sla.cls.ihe.tohoku.ac.jp/outline/>，（参照 2015-12-01）。

21 横山美佳，東北大学生のための教育・学習支援。東北大学附属図書館調査研究室年報，2012，1，p.47-54。

22 坂本香代，工藤 未来，レポート作成法の授業における協働学習の活用：グループディスカッションの試み。東北大学附属図書館調査研究室年報，2013，2，p.39-44。

23 21 に同じ。p.47。

24 西尾＝西尾剛教授（附属図書館副館長，農学研究科）
酒井＝酒井聡樹准教授（生命科学研究科）
渡辺＝渡辺正夫教授（生命科学研究科）
犬塚＝犬塚元教授（法学研究科）
泉山＝泉山靖人助教（教育情報学研究部）

学術情報探索法 (4) 論文・新聞記事の探し方	[西尾] 図書館職員	雑誌論文の性質と必要性 CiNii の検索方法, OPAC との違い 雑誌論文の入手方法 図書館の参考文献リストから論文を探す方法 ・新聞の特性 〈PC 実習〉
レポート作成法 (4) レポートの着眼点を見つける	[西尾] 図書館職員	・レポートの「扱う問題」・「問題意識」・「着眼点」 ・扱う問題や着眼点の見つけ方 〈グループディスカッション〉
レポート作成法 (5) レポートのアウトラインを組み立てる	[西尾] 図書館職員	・アウトラインの組み立て方 ・論理展開 ・初歩的な文章表現 〈グループワーク, グループディスカッション〉
レポート作成法 (6) 引用文献の書き方	[西尾] 図書館職員	・「事実や意見に対する考察」というレポート本文の型 ・コピーと引用の違い ・正しい引用方法 ・引用文献, 参考文献の書き方
研究活動の実際と情報検索 (1) ー自然科学分野	渡辺	・自然科学系の研究活動の実際と情報探索の事例
研究活動の実際と情報検索 (2) ー人文社会科学分野	犬塚	・人文社会科学系の研究活動の実際と情報探索の事例
レポート作成法 (7) より良いレポートを目指して	[西尾] 図書館職員	・班別共同研究の研究計画発表 (投票による上位5班) ・班別共同研究の振り返り〈グループディスカッション〉 ・より良いレポートを書くためのまとめ
大学図書館の活用法 (2) まとめーこれから大学図書館をもっと活用するために	泉山	・本授業全体のまとめー学術情報の最新動向, 効果的な大学図書館活用方法 ・授業評価

この年度から後期から前期に変更された。前年度までの大幅な受講生減少を受けての変更である。それに伴い新入生を意識した「大学生のレポート作成入門」という科目タイトルに変更された。新入生のニーズを正確に受け止めたためか、前年度33名であった受講生が、約4倍の120名となった。

一方前節で示したように、当科目は、受講生が減少し、少人数を手厚く指導する授業となっていた。これまで通りでは、この大人数授業の運営が難しいと予想した。つまり100名を超える受講生への講義は、一方向一斉講義体制時代には管理が可能であったが、昨年度と同じ手法を取っては運営が困難なのである。課題は

大人数に対していかに昨年度までのアクティブラーニングの成果を維持しつつ、半期の運営を円滑に行うかである。

暫定的ではあったが、以下の様な運営体制の変更を行った。

- ・受講生120名の班分け(5-6名)を行い、5班ごと(約30名)を1グループにする。グループごとに、担任(本館職員)、副担任2名(分館等職員, TAかSLA)が監督する。
- ・各班の共同テーマを受講生の班別討議やTA・SLAとの面談で設定する。

- ・最終レポートは、各班の共同テーマに関連する個人テーマで作成する。
- ・班別に共同テーマの共同研究計画書を作成する。図書館に掲示し、受講生全員がそれを確認した上で班別の共同研究計画書について投票する。
- ・投票結果上位 5 班にプレゼンテーションをさせ、受講生への理解を更に促す。

また受講生の急増を受けて会場変更も検討されたが、端末 1 台につき 2 名で実習する²⁵ こと等の工夫を施すことにより、平成 26 (2014) 年度にリニューアルしたばかりの当館 (本館) に設置されたアクティブラーニング施設 (主にグローバル学習室) や既存の PC エリアを予定通り会場とした。

これだけ大規模にアクティブラーニングを行うことは、挑戦的試みである反面、諸処でスタッフの混乱を招いた。混乱の一例を挙げると、開講中は早急に対応せねばならないことの処理を優先したため、スタッフへの十分な説明を行うことができなかった。このため暫定的な方針転換と運営変更の意図が、スタッフに十分伝わらないまま、講義運営を行うことになってしまった。

しかし 15 週にわたる講義及び最終レポート等の評価作業を苦勞の未完了させ、無事終わることができた。

6.2 平成 27 (2015) 年度の全学教育授業評価：改善すべき課題を中心に

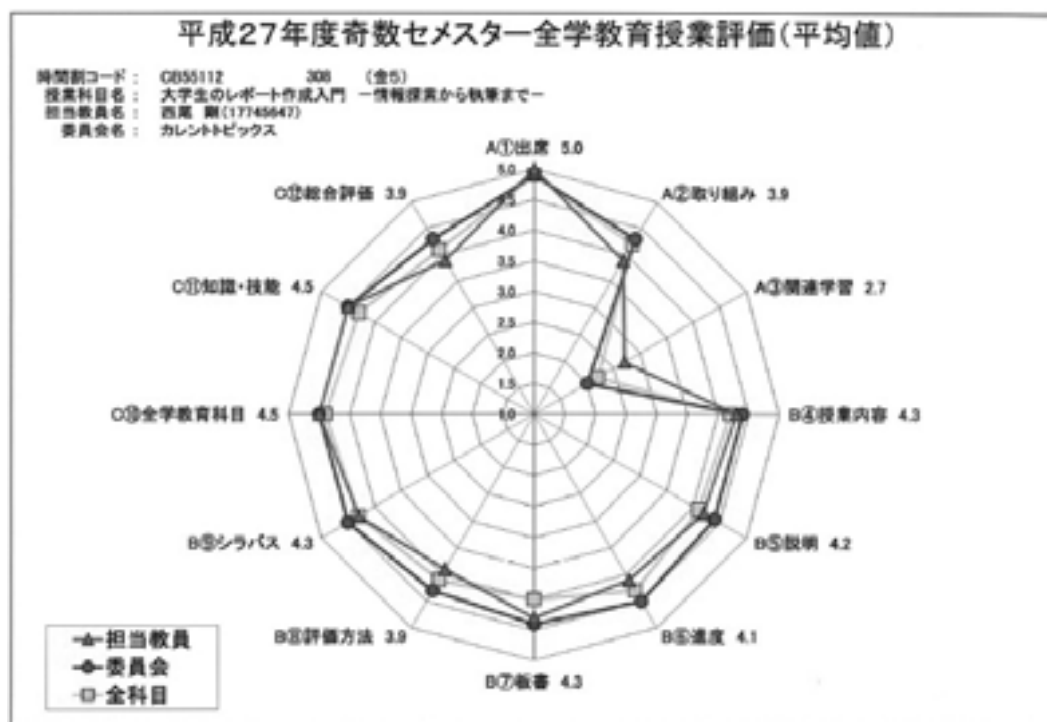


図 2 平成 27 年度当科目の授業評価結果²⁶

本科目の特筆すべき点は正規の受講生 114 名に対し履修放棄者や不可の者が 10 人と 1 割を切り、予想していたよりも少なかったこと、講義の 8 割以上を出席した者が全体の 96%、特に皆勤者が 67 名と全体の半数を

超えたこと、が挙げられる。図 2 の授業評価等の分析からは、その理由が計れないものの、全体として出席を促す何かがあったことが推測できる²⁷。また班別活動や面談など、授業時間外に受講生が時間を取る必要が

25 当館 (本館) のメインエリアには、PC が 75 台ある。受講生の人数よりも下回るので、何らかの対策が必要であった。その結果、1 台につき 2 人で使うようにした。

その結果、2 人での実習は教え合いを促進し、講義の聞き漏らしによる意欲減退が減少したように感じる。なお班ごとに同じ PC ポッド (定員 3 名) に着席したことも、班ごとの情報共有に効果があったと考える。

26 △が当科目の評価であり、他の線よりも外側であれば高評価、内側であれば低評価である。

27 筆者が複数の受講者 (特に皆勤者) に、その後口頭で出席理由を確認したところ、様々な意見があり、一括りにはできなかった。

出たためか、授業評価の項目「授業時間以外での関連学習」の数値が高いという結果となった。

一方、授業評価の項目で「意欲的に取り組んだか」「授業進捗の速さの適切さ」「成績評価方法の説明」「総合評価」等が他の全学教育科目と比較して、低いポイントであった。自由既述欄には「最終レポート締め切

りの早さ」「テーマ設定のディスカッション時間の長さ」「講義内容の重複」といった問題点を指摘する意見が複数見られた。暫定的に行った対応に問題がある点と、そもそもの講義設計に問題がある点に分けられるので、次年度以降両方を意識して改善をはかりたい。

7. 今後の展望：全学教育レポートWGの活動との連携について

本来、情報探索及びレポート・論文作成技術は新入生全員が学び、身に着けるべきスキルである。新入生が平成27年度新学期に100名を超える規模で受講し、当科目の履修者数がV字反転したとはいえ、全学の新生は毎年約2,700名である。この人数は全新生の1割にも満たない。この結果に甘んぜず、新入生全員にアカデミックライティングの技法と情報探索を教授し、高校までの授業から転換をはかることが望まれる。

一方図書館職員は、情報探索は職掌内であるが、アカデミックライティングについては本来守備範囲の外である。後者に関しては専門の養成課程を経た上で、資格要件を問われて入職した訳ではない。つまり図書館職員は「探索技術は分かるが、何を探し、何をまとめ、どう書くかは専門家ではないのである²⁸⁾」ということである。確かに守備範囲である情報探索のスキルアップのため、レポート・論文執筆というゴールを見据えた当科目の運営業務に対して筆者は、大きな意義を感じている。しかし図書館職員が職掌外のアカデミックライティングを大学の講義で教えることは、「あくまで大学教育に携わることの意味を重く捉えなければならない²⁹⁾。」という考えからすると全面的に首肯できるものでもない。図書館職員はあくまでもライティングは素人である一方、専門としてトレーニングを経てきたベテランが大学内に多数在籍している。では今後、当科目をどのように考えて運営して行けば良いのであろうか。このベテラン、つまり大学教員とこの点で一層連携することはできないものであろうか³⁰⁾。

幸いにも「1. はじめに」で述べたように、今年度から「初年次のレポート作成とその指導を支援する共通教材の開発」ワーキンググループが立ち上がり、活動を開始している。レポートWGでは、平成29年度までに以下の目標の達成を目指している。

1. 学生用のレポート作成ハンドブックを作成し、大学サイトにて公開する。平成30年度以降の新入生には、印刷版の無償配布も行う。
2. 教員用のレポート指導ハンドブックに加え、共用ルーブリック、授業実践例等の資料集を作成し、大学サイトにて公開する。
3. 学習支援センター及び附属図書館の連携により、上記1, 2の成果を活用した学生のライティング支援システム、教員の授業支援システムを構築する。
4. 複数の講義科目、演習科目にて上記1, 2の成果を活用し、分野横断型のライティング指導 (Writing Across the Curriculum) を実施する。

平成27(2015)年度の活動は、国内の調査活動が中心である。最初の取り組みとして、平成27年度前期に全学教育科目でレポートを課した教員(常勤・非常勤問わず)に対して、9月から10月にかけてインタビュー調査を行った。「レポート」といっても、教員や科目によって様々なタイプがあることを再認識させられた調査結果であった。この調査については後日成果が公表³¹⁾される予定である。また年度末にまでに、国内のライ

28 拙稿。図書館と情報リテラシー：東北大学大学院教育学研究科人間形成論研究室で行った6年間の図書館講習会について。教育思想、2010, 38, p.54.

29 忽那一代。京都大学図書館・情報リテラシー教育の現状：全学教育科目「情報探索入門」の11年。図書館雑誌。2008, 102 (11), p.779.

30 なお28の拙稿では、別の選択肢として図書館職員の職務が変容する、というモデルも提案した。しかしこれは別の資格要件が問われ、採用・養成・勤務の形といった職制自体が変わる必要があり、近々の実現は難しいと考える。しかし全国的には図書館職員でありながら、非常勤講師の発令を受け講義を担当する職員の先例も増えつつあり(筆者も前職である宮城教育大学附属図書館時代に、司書教諭科目の講義担当者として非常勤講師の発令を受けていた。)、これを変容の兆しと考えることもできる。

ティング関連事業を実地調査し、教材の比較と検討を行う予定である。

以上簡単であるが、レポート WG の活動を紹介した。これまで 12 年間当館が運営してきたこの科目の成果を

土台とし、当 WG と連携して東北大学の全新生へ情報探索・アカデミックライティングスキル指導の実現を目指したいと考えている。

8. おわりに

当科目に関しては、本稿に書ききれなかった様々な試みや調査、事象が多々ある。しかし、紙幅の関係でそれらを網羅的に記録することができなかった。ご寛恕頂ければ幸いである。個人的な期待を述べると、全学教育で情報探索・アカデミックライティングが必修化された際に、当科目のその後の展開や補遺をまとめる者が出れば良いと考える。

なお本稿は、本文にて取り上げた高度教養教育開発推進事業「初年次のレポート作成とその指導を支援する共通教材の開発」(代表：菅谷奈津恵)による研究成果の一部という性格も持つ。

本稿をまとめるに当たり次の方々にお世話になった(以下姓の五十音順(敬称略))。

京都大学附属図書館情報サービス課課長補佐 赤澤久弥, 東北大学大学院教育情報学研究部 泉山靖人,

秋田大学附属図書館 加藤信哉, 東北大学大学院経済学研究科図書室 工藤未来, 仙台高等専門学校図書館 小飯塚猛, 宮城教育大学附属図書館 代田有紗, 東北大学附属図書館農学分館図書係長 菅原透, 東北大学附属図書館事務部長 米澤誠, 宮城教育大学附属図書館情報サービス係長 渡邊愛子

特に当報告を作成する発端となった, 東北大学高度教養教育・学生支援機構 串本剛, 菅谷奈津恵, 中川学(以上, レポート WG)には厚く御礼申し上げたい。最後に, 当科目の運営に携わった全ての皆様にお礼申し上げて筆を置くことにする。

(よしうえ しょうえい, 附属図書館情報サービス課 参考調査係)

31 串本剛ほか, 東北大学の全学教育におけるレポート作成指導: 入学したての学生を対象にした講義形式の授業科目を中心に(仮題), 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要, 2016, 第2号(掲載予定)。